

# 『聖書解釈の歴史』

——新約聖書から宗教改革まで——

出村 彰・宮谷宣史編

(B6版・四二二頁・三五〇〇円)

日本基督教団出版局刊・一九八六年

土井 健 司

本書は今から約二年前に日本基督教団出版局より出版されたものである。題名から察せられるように本書は新約における旧約解釈にはじまり、教父時代、中世を経て宗教改革に至るまでの主な聖書解釈を取り上げ、それぞれの担当者がそれぞれの聖書解釈の概要を記したものを編集したものである。従って本書はまず吾々に過去の聖書解釈に関する歴史的知識を提供してくれるものである。例えば教父時代のアレクサンドリア学派の聖書解釈やアンティオキア学派の聖書解釈についての基本的知識を与えてくれるのである。各論の学問的水準については評価出来る立場ではないので他に委ねたいが、少なくともどれも通り一辺の説明ではなく、十分読書に耐えるものである。しかし本書の意図は単に吾々に歴史的知識を与えて、私達を博学とする点にあるのではない。即ち単なる情報の提供を目的としたものではないのである。編者の一人である宮谷氏は序論の中で本書

聖書解釈の歴史(土井)

の編集の基盤となった洞察として、聖書解釈史が教会史の重要なポイントであるということと、更にもう一つ、今日聖書解釈に関する様々な問いの探求には聖書解釈の歴史を知る必要があるということも挙げている。従って本書の意図は単なる歴史的知識の伝達だけでなく、その伝達を通して読者自身が聖書解釈について考えるのを手助けすることなのである。吾々自身が今日、聖書解釈とは何か、如何にすれば聖書は理解されるのか等を問ひ、その問いを遂行しようとするとき、聖書解釈の歴史はその解答を提示するまではいかなくとも、必ずず実り豊かなものを与えてくれるのである。実際本書を読んでみて驚かされたことは、過去の聖書解釈の豊かさや多様さである。頭が鈍いせいでもあろうが、本書を一気に読み通すことは出来なかった。あちらこちらで思わず考え込んでしまった。

聖書解釈とは何か、聖書の解釈の真理性は何に基づくのだろうか。学と経験とが分離している吾々としては、こういった問いを単に学的に即ち学問の領域に限って問うのではなく、吾々自身の経験の場に則して問わなければならない。今日の吾々はこれに対する答えとして、まず歴史的な真理性を挙げる事が出来る。即ち聖書解釈はそれが歴史的な事実の中に適中して置かれている程正しいのである。従って歴史的な事柄を無視する解釈は正しくないのであり、解釈の前提事項として歴史的な研究が置かれるのである。では聖書解釈の真理性が歴史的な真理性に基づくということ自身どれほどの妥当性を有するのだろうか。もちろん歴史的な判断が問題である場合それは絶対的である。例えば

パウロがその時ここで言っている意味という事は全く歴史的な事柄であり、先の判断基礎が妥当する。しかし吾々は聖書を第一には福音を宜べ伝えるものとして捉えるのであって、この福音を明らかにする為に歴史を方法として用いるのである。では方法としての歴史は絶対的なのだろうか。しかし歴史を方法とした福音理解は何か三人称的な感じがし、福音という「私」にかかわる一人称的なものが希薄であるようにも思われる。では、ある意味で直接一人称的な解釈、いわゆる霊的解釈の方がより優れているのか。しかしそれによって解釈の客観性が失われる危険があるのは事実であり、各自が自分勝手な解釈に閉じ込める危険性がある。主観性と客観性、霊と文字、アレゴリカルとリテラル、この二極間の問題こそ古くから問われてきたことであるのである。これらが様々なニュアンスとアクセントをもって聖書解釈の歴史は展開してきたのであり、本書を通して吾々はその息吹を感じるのである。歴史よりも信仰義認の使信を基盤に旧約を解釈したパウロ、又歴史よりも慈しみ深い神にふさわしい意味を見出そうとしてアレゴリカルな解釈を展開したオリゲネス、それに対し解釈は実際に語られたことを超えてはならないとして歴史的解釈にアクセントを置くアンティオキア学派等を通して、吾々は聖書解釈という事柄についてより一層深く、豊かに考えることが出来るのである。

最後に若干の批判と要望を記しておきたい。まず他の書評の中でも述べられていることであるが、訳語の不統一が挙げられる。例えばアウグスティヌスの *De doctrina christiana* の訳語

がまちまちである。又茂泉氏がアウグスティヌスのテキストとして挙げているミューン版が適切かどうかもし疑問である。又本書で取り扱われていないものとしていくつかがあるが、中でも何故ギリシャ正教が入っていないのか少し不思議である。本書の性格からして全てを取り扱うことが出来ないとしても、ギリシャ正教の流れは教会史の中で大きな位置を占めるはずであり、是非とも取り扱ってほしかった。以上気付いた点を少し挙げたが、そういった点は別にして本書は吾々の聖書解釈についての思惟にとって、一つの案内役を果すものであるものであり、その意味で評価されるべきであろう。

## 『新約聖書正典の成立』

荒井 献編

(A5版・三七五頁・四五〇〇円)  
日本基督教団出版局刊・一九八八年

藤原 一二三

今日、われわれは、「聖書をどう読むのか」という課題の前に、しばしば立たされる。それは、われわれが手にしている聖書文書が、ある時、ある所で、ある目的に基づいて書かれ、また読まれたものであるのだが、その文書が、今日のわれわれにどのようなかかわるのか、また正典としての聖書を読むとはど